

育児休暇と産後クライシス

渥美由喜先生

「イクメンでいこう」、非常に興味深いお話を楽しく聞かせていただき有り難うございました。

私は医療現場でしか働いたことがなく、女性が多い環境で産休・育休を皆がとることがあたりまえでした。

しかし、よく考えると男性看護師は育休をとっていないと気づきました。

かくいう私も、以前は夫婦で看護師であったのですが、自分だけがとるのがあたりまえと感じていました。

育児休暇中は夫婦の大きな転機でした。

自分の生活が 180 度変わり、子供に昼夜なく起こされ、疲労困憊。

しかし夫は何も変わらずに、むしろ「家にいるから家事は今までよりできるだろう」という反応。

働いているときは分担されていた家事も、何故か「休んでいる」と思われ全て私にまわってきました。

働いているという名目はなんて便利なのか、と思ったことを思い出しました。

夫はつきあいで飲み会、自分は何ヶ月も近所しか出歩けず自分のことを鏡で見る暇もない。

まさに今思うと産後クライシスでした。

結局私はその後泥沼化し、離婚という道筋になってしまいました。

育休中に一度家事分担が変わってしまうと、1年後に戻すことは困難でした。

「今まで休んでいたのだからやって欲しい」「今までできていたのだから、仕事に行ってもできるはずだ」

「どこの母親も家庭と仕事は両立している」「自分は一般男性より手伝っている」何気ない言葉だったのでしょうが、一つ一つがわかってもらえないのだと心に染みしました。

8年前に先生のお話を聞いていたら悩み方が違ったのかもしれないと思います。

9日にパキスタンで、教育を受けているという理由のみで少女がタリバーンに銃撃されたというニュースを見ました。

男性が女性を支配しようという国はまだ多くあります。

日本はやっと男性と女性が協力し合う環境に変わりつつあります。

まだまだ女性を理解しようとする男性を認めない社会もありますが、もっと世界に誇れるほど男性と女性が助け合える国作りをして欲しいと思います。

育児という夫婦の転換期は、チャンスでもあるのだと思いました。
お互いの苦勞を知って初めて「ありがとう」と思うことができる。
夫婦は競うものではなく、協力しながら感謝してゆくものなのでしょう。

国にも職場にも妻にも夫にも甘えるのではなく、一人一人が自立して助け合える環境を作れば、将来的に力のある国になるはずです。
少子高齢化を乗り切るためにも、個人の自立が促せる環境作りが必要だと感じました。
その方法がライフワークバランスなのだと思います。
もっともっと全国に広がって欲しいと思います。

素敵なお講義ありがとうございました。